
浪漫ゴシック

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浪漫ゴシック

【Nコード】

N4243V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

急に大正チックな雰囲気になった学校の前の喫茶店。そこには奇麗な母娘がいて。大正ロマンを現代に書いてみました。

第一章

浪漫ゴシ

ツク

学校の前にだ。いきなり店ができた。

その店は喫茶店だった。それまでも喫茶店だったが急に別の店になったのだ。

「あれ？今度の店って」

「ああ。やってる人変わった？」

「何か違うけれど」

外見がだ。それまで白い清潔な感じだったのがだ。

大正を思わせる古風なドラに外観、看板も漢字で書いただ。そうした店になったのだ。生徒達はその外観や看板を見て言うのだった。

「何でこんな感じになったんだ？」

「ちよつとわからないよな」

「またレトロだよな」

「そうだよな」

こつ話をする彼等だった。そうしてだ。

興味を持てばだ。次の行動は。

実際に店の中に入る。するとだ。

店の内装もだった。やはり大正を思わせるものだった。アンティークな装飾で飾られテーブルや椅子もそうした感じになっている。

何処か懐かしさを感じさせそれでいて落ち着く。そうした店だった。

その店で働いているのはというた。

黒髪を綺麗に伸ばした楚々とした大人の美女とだ。小柄な左右を小さなテールにした女の子だ。そして二人共その服は。

エプロンに和服だった。その服でいるのだった。しかもだ。

その店はコーヒーが絶品だった。注文の後で豆から淹れるコーヒ

「はだ。まさに最高のものだった。それを知った学生達はだ。」

店に入り浸りになった彼等の間で評判になった。それを聞いてだ。その学校の今村秀次郎先生、社会を教えているその先生はだ。興味を持ったのだった。そのうえで職員室で同僚の先生達に尋ねた。

「あの学校の前のお店ですけれど」

「ああ、あの喫茶店ですね」

「大正珈琲ですね」

「そういう名前なんですか」

実は店の名前を聞いたのはこれがはじめてだった。

「あのお店って」

「そうですね。今生徒達に大人気なんですよ」

「前のお店の人が引退されて」

前のお店の人のことは先生も知っていた。気のいいお爺さんが一人でやっていた。その頃からそこそこ人気があった。

「それであのお店場所を買って」

「あそこに入ったんですよ」

「そうですね」

「何でも母娘らしいですよ」

このこともだ。話されたのだった。

「御主人が事故で亡くなられて」

「それで母一人娘一人でやっておられるそうです」

「そうしたお店なんですよ」

「そうですね」

先生は話を聞いてしみじみと述べた。

「大変ですね」

「そうですね。女手一つでお店だけでなく娘さんも育ててですか」
「ら」

「立派な人ですよ」

「それにコーヒーも美味しいですね」

肝心のコーヒーの話が出た。するとだ。

先生の目がだ。ぴくりと動いた。そのうえでだ。

同僚の先生達にだ。今度は自分から尋ねたのだった。

「コーヒー、美味しいんですか」

「はい、そうですよ」

「とても」

「そうですか」

実は先生はコーヒーが好きだ。それもかなりだ。それでだった。その店に確かな関心を得た。そのうえでだ。

先生はお店に入った。扉をくぐるとベルの音がチリンチリンと鳴る。錫のベルだ。この辺りにも独特の趣きが出ていると言えた。

そうしてだ。前を見るとだ。

カウンターはだ。木造である。ダークブラウンのそのカウンター席は丸く背がない。完全な木造でそこにも趣きが見られた。

カウンターのところにはだ。彼女がいた。

大きな二重の目をしていて瞳が大きい。口は小さい。そして黒髪を綺麗に伸ばし背中の中半分まである。前髪の下の眉は細く垂れたものだ。

その美女がだ。穏やかな笑みで先生に言ってきた。 86

「いらっしやませ」

「はい」

先生は美女の言葉に頷いた。そのうえでだ。カウンターの席に座る。そうして。

第二章

美女にだ。こう告げた。

「コーヒー貰えますか」

「コーヒーですね」

「はい、御願います」

こう告げたのである。

「それを」

「わかりました。それでは」

美女は笑顔で頷きだ。そうしてだった。

豆を挽いてから出した。それは。

「今日のコーヒーですが」

「グアテマラですね」

先生は淹れられたそのコーヒーを見て述べた。

「それですね」

「おわかりですか」

「はい、香りで」

それでわかるのだった。この辺りはコーヒー通だからである。

「わかります」

「左様ですか」

「では頂きますね」

「はい、どうぞ」

こうしたやり取りから実際に飲んでみる。するとその味は。

「これは」

「如何でしょうか」

「見事です」

その味についての言葉だった。

「ここまでのコーヒーとは思いませんでした」

「そんな、言い過ぎですよ」

「言い過ぎではないです」

そうではないとだ。美女の言葉を否定するのだった。

「本当に。これは」

「御気に召されたのですね」

「はい」

まさにだ。その通りだというのである。

「いや、これはいい」

「左様ですか」

「ではまた」

「また来て頂けますか？」

「勿論です」

笑顔での言葉だった。

「そうさせてもらいます。そして」

「そして？他に何かありますか？」

「私だけ来ては勿体ないですね」

笑顔のままだ。先生は美女に話すのだった。

「これは息子も連れて来ないといけません」

「お子さんがおられるのですか」

「妻が一人に息子が一人です」

先生はその家族のことも話した。

「その息子も連れて来ないといけませんね」

「お子さんもコーヒーがお好きなのですか？」

「まだ中学生ですがこれがです」

我が子の話になるとその目が自然に笑みとなる。そうしての言葉だった。

「コーヒーはあれがいいとかこれがいいとか」

「そうした方なのですか」

「はい、そうなんです」

こう我が子について話す。

「そうした方でして」

「成程、ではご子息もですか」

「連れて来て宜しいでしょうか」

「どなたでも歓迎させてもらいます」

「これが美女の返答だった。

「是非。お連れになつて下さい」

「わかりました。それでは」

「ご子息もお待ちしています」

「ところで、です」

先生は話を変えてきた。話が一段落したところだ。

「貴女のお名前は」

「私の名前ですか？」

「私は今村秀次郎といひます」

礼儀としてだ。自分の名前をまず話したのであつた。

「向かい側の学校で国語を教えています」

「学校の先生なのですね？」

「はい、そうです」

己の身分も話した。

「そして貴女のお名前は」

「喜多村といひます」

「喜多村さんですか」

「主人の苗字はそのままです」

つまりだ。まだ心は亡き夫にあるというのだ。だが先生はそれには構わなかつた。先生が興味があるのはコーヒーだけだ。美女には興味がないのだ。

第三章

「以前は結城といいましたが」

「そうなのですか」

「はい、喜多村京華といます」

「京華さんですね」

「そうです。それで」

「御仕事はここで」

「それで娘ですが」

「娘さん？ああ、そういえば」

先生は美女、京華の言葉からだ。あることを思い出した。生徒達の話ではだ。この店にはもう一人いるのだ。そのもう一人とはだ。

「貴女には娘さんも」

「はい、います」

まさにだ。そうだというのである。

「今丁度」

「店におられますか？」

「お皿を洗っていてお店の奥にいますけれど」

「そうですか」

「呼びますね」

先生が何かを言う前にだ。その前の言葉だった。

「柚子ちゃん」

「何、お母さん」

幼女の高い声が聞こえてきた。その店の奥からだ。

「何かあったの？」

「ちよつと来て」

「こつ言つのであった。」

「お客様よ」

「お得意様？」

「お客様は誰でもお得意様よ」

何気に商売の基本を押さえている京華の言葉だった。そして柚子という少女の言葉もだ。幼いながらわかっている言葉だった。

「だから来て」

「ええ、わかつたわ」

この返答の後でだ。黒い着物に白いエプロンの女の子が来た。髪は黒髪を左右で小さいちょんまげにしてい目は大きく二重だ。ただしやや吊り目なところが京華とは違う。

しかしその顔立ちは母親によく似ている。その女の子が来たのだ。

「この人ね」

「そうよ、お向かいの学校の先生でね」

「はじめまして」

ぺこりと頭を下げる女の子だった。

「喜多村柚子です」

「はじめまして、今村秀次郎です」

「お向かいの学校の先生さんですね」

「そうだよ。宜しくね」

「はい、これからも毎日来て下さい」

こう話す柚子だった。クールな顔で。

「待っていますから」

「うん。見たところ」

「何でしょうか」

「小学生かな」

柚子のその小さな身体を見ての言葉だ。

「小学校一年かな」

「そうです」

まさにだ。その通りだというのである。

「今度七歳になります」

「そうなんだ。じゃあうちの高校に入るのは」

「受験に合格したらですけど」

それからだと。随分クールな口調だった。

「九年後ですね」

「そうだね。九年かあ」

「九年後はかなり楽だと思います」

「楽って？」

「通学が」

それだというのである。

「お向かいですので、学校が」

「ああ、そうだね」

先生も言われて気付いた。まさにその通りだった。

「もうすぐそこだからね」

「ですからその時を楽しみにしています」

こっちは言うがだ。その表情は変わってはいなかった。

「では、コーヒーですけれど」

「美味しいね、ここのコーヒーは」

「これからも毎日楽しんで下さい」

要するにだ。毎日来いというのである。

第四章

「期待しています」

「そうさせてもらつよ。息子も連れて来るからね」

「はい、では息子さんも」

「コーヒーを飲むからね」

「はい、それでは」

こう話してであつた。数日後。

先生は実際にだ。息子を連れて来た。黒髪がさらさらとしており目が爽やかなだ。背の高い実に素直そうな少年が先生と共に店の入り口をくぐつた。

そしてだ。少年は先生に対して尋ねるのだった。

「このお店だよね」

「ああ、そうだ」

先生はその少年に言葉を返した。

「このお店だぞ」

「ふうん、いいお店だね」

少年はそのお店の中を見回しながら言った。

「こつこつ何て言うのかな」

「浪漫主義か」

「ロマンじゃなくて？」

「浪漫だ」

そちらだといつのである。

「こつこつというのは浪漫と言うんだ」

「何で漢字なの？」

「片仮名だとそれは欧州のそれになって漢字だと日本のそれになる」

「ああ、そういうことだね」

「これでわかつたな」

「まあそれでね」

わかったと。少年は先生に答えた。

「わかったけれどね」

「ならよしだな」

「それでコーヒーだけれどさ」

話は本題に入った様である。少年は先生にこのことを尋ねるのだった。

「お父さんが飲んでよかったんだよね」

「その味は保障するぞ」

「楽しみにしてるよ。じゃあ何処に座ろうかな」

「そこ、空いてるわよ」

柚子がだ。二人のところに来て声をかけた。

「そこはどう?」

「ああ、有り難う」

少年は柚子の言葉に対して彼女に顔を向けたうえで礼を述べた。

「それじゃあそこに座らせてもらうね」

「うん、ところでお兄さん」

「何かな」

「お兄さん先生の息子さん?」

「うん、そうだよ」

その通りだとだ。少年は柚子の問いに答えた。

「名前は修治っていうんだ」

「修治さんね」

「太宰治の本名でね」

太宰治の本名は津島修治という。彼の家は青森で大地主だった。

今も政治家を輩出していることで有名な家である。その彼の名前だというのだ。

「父さんがさ。国語の先生だから」

「それでなんですか」

「いい名前なのかな」

「選んだんだぞ」

先生がここでその修治に言う。

「どの名前がいいか悩んでそれでだ」

「太宰になつたんだね」

「そうだ。まあ他にも鏡太郎やそういつたものもあつたがな」

「まあそうなんだ。それで僕の名前は修治なんだ」

修治は柚子に顔を戻してまた話した。

「覚えてくれたかな」

「はい」

柚子は修治の言葉にこくりと頷いた。

「とてもいい名前ですから」

「いい名前かな」

「凄くいい名前です」

「そうだといいのである。」

「素敵ですね」

「素敵かな」

「あの、それで」

柚子の態度が何処か気恥ずかしそうなものになった。そしてだ。

彼女はだ。こう修治に尋ねてきたのである。

「修治さんお歳は」

「歳？十四だよ」

「十四歳ですか」

「うん、今なつたばかりだよ」

「私は今年七つになります」

柚子は自分の年齢も話した。

第五章

「七つ違いですネ」

「そうだね。ええと、お嬢ちゃんの名前は？」

「柚子です」

年齢の後でだ。名前を話した彼女だった。

「宜しく御願います」

「そう、柚子ちゃんね」

「それでなのですけれど」

何故かだ。修治から見ればそうなることだ。柚子は顔を赤らめさせた。そうしてそのうえで修治に対してこう言っただった。

「修治さん、よかったです」

「うん、よかったです」

「コーヒーの他にです」

おずおずとして彼に話す。

「スイーツはどうでしょうか」

「スイーツ？」

「うちのお店はケーキやクレープの他に日本のものもあるんです」

「浪漫だからだね」

「はい、和風でもありますから」

それでだ。あるというのである。

「何がいいでしょうか」

「ううん、それだったらね」

「お勧めは」

修治が言う前にだ。柚子が言ってきた。

「白玉あんみつです」

「白玉だね」

「はい、それです」

それだというのである。

「それはどうでしょうか」

「わかったよ。それじゃあね」

笑顔で頷く修治だった。柚子のその言葉にだ。

そうしてそのうえでだ。彼女のそのお勧めの白玉あんみつをコーヒーと共に頼んだのだった。しかし連れて来た先生はというのだ。

コーヒーだけだった。そしてだ。

その空いている席に息子と向かい合って座ってだ。こう我が子に言うのであった。

「何か違うな」

「違うって？」

「お父さんはコーヒーだけだぞ」

先生が言うのはこのことだった。

「それで何で御前はお店の人からお勧めまで来るんだろっな」

「さあ。けれど何かさ」

「何か？」

「悪い気はしないね」

修治はにこにことして父親に言葉を返した。

「いや本当にね」

「女の子のお勧めはか？」

「そうだよ。父さんだって母さんに勧められたら悪い気はしないよね」

「怖いな」

先生が言うのはそちらだった。

「それは怖いな」

「怖いんだ」

「それは結婚してからわかる」

先生は実は恐妻家だ。この世で怖いのは奥さん以外にない。要するにこの世で最も恐れているものは奥さんなのである。そういう人なのだ。

「よくな」

「そうなんだ。結婚してからなんだ」

「とにかくだ」

「ここぞだ。話を変える先生だった。」

「御前、まさかな」

「まさかっつて？」

「とりあえずコーヒーを飲め」

一旦我が子にそれを勧めた。すると彼は実際にそのコーヒーを飲んだ。

それからだ。再び我が子に問うたのであった。

「どうだ？美味いか？」

「いいね、この味」

にこりと笑ってだ。父に答えた。

「美味しいよ、凄く」

「また来たいか？」

「うん、来たいよ」

にこりとした笑顔をそのままにしての返事だった。

第六章

「是非ね」

「わかった。それならな」

「それなら？」

「大事にするんだな」

「こっちは我が子に話すのだった。」

「わかったな」

「大事って？」

「お父さんとお母さんは知ってるか？」

「だからお父さんとお母さんって」

「お父さんとお母さんの年齢差は幾つだ？」

結構だ。具体的に話す先生だった。

「幾つだ、それは」

「確か九つだったよね」

先生の方が九つ年上である。結構離れていると言えば離れている。

「そうだよね」

「そうだ。だからだ」

「だから何が言いたいのかな」

修治は首を捻って述べた。どうしてもわからないというのだ。

「全然わからないんだけど」

「今はわからないか」

「本当に全然わからないけれど」

また言う修治だった。

「父さん何が言いたいんだよ」

「とりあえずだ。またこの店に来るな」

「うん、来るよ」

それは確かだというのだ。

「気に入ったから。高校もさ」

「あの高校か？」

「うん、あの高校」

父親に話しながら扉の向こう側に目をやる。そこにこそあるのである。

「あの高校に行くよ」

「そうか。学力は大丈夫だったな」

「丁度だよ」

まさにだ。その高校を受験し合格するのに丁度いいレベルにあるというのだ。

「それは父さんが一番知ってるじゃない」

「それもそうだけれどな」

「受けるよ。それで高校に入ってさ」

「このお店に通うんだな」

「そうするよ。是非ね」

笑顔に戻って話す修治だった。そしてだ。

彼のその言葉を聞いてであった。柚子もだ。

笑顔になってだ。修治に話した。

「それじゃあですけれど」

「うん。それじゃあ？」

「御願います」

頭をぺこりと下げた。こうして話すのであった。

「これからも」

「うん、宜しくね」

柚子の言葉の真意は察する、いや気付くことなくだ。こう答える彼だった。

「それじゃあね」

「じゃあいいな」

また話す先生だった。ここで我が子にだ。

「この店にこれからもな」

「通うよ」

こう先生、自分の父親に話す我が子だった。そうしてだ。彼は高校は実際に店の前の学校に入学した。そうして店にずっと通うのだった。

大学に入るとだ。大学はその高校が付属している大学だ。半分エスカレーターで入学してだ。やはりその店に通いだ。

大学に入りアルバイトをはじめた。そこはだ。

「御願いいね」

「はい、宜しく御願いします」

京華、彼が中学の頃から一切変わっていない美貌の持ち主の彼女が修治に話す。彼も着物になりエプロンを身に着けている。

そしてだ。その横にはだ。

柚子がいた。今彼女は小学六年だ。

背はかなり伸びた。顔はそのまま成長した感じで可愛さの中に奇麗さが宿ってきていた。その彼女が修治に話してきた。

「私もです」

「あつ、柚子ちゃんもだね」

「はい、御願いします」

こう修治に声をかけるのである。

「お店の中でも」

「わかったよ。それじゃあね」

「はい」

こうしてだ。彼は店のアルバイトもするようになった。店のアルバイトは忙しかったが楽しかった。そのアルバイトは三年になっても続けた。

第七章

そして就職活動をしようという時期にであった。

柚子、中学三年になった彼女がだった。

既に少女、それもかなり整っている顔立ちになって背も高くなつた彼女がだ。店の奥で皿洗いをしている修治に対してこう言ってきたのである。

「あの」

「うん、お客さん？」

「お客さんじゃないです」

それではないというのである。

「あの、私高校は」

「ああ、あの高校受けるんだよね」

「ここです。最初にこの店に来た時と同じくだ。」

店の扉の向こうにある学校を見た彼だった。しかしだ。朋子はだ。その彼にこう話すのだった。

「私、あの高校受けますから」

「そうするって。いつも言っているよね」

「はい。それで」

「それで？」

「就職、ここじゃ駄目ですか？」

「こう修治に言うのであった。」

「このお店で」

「喫茶店のウェイターにだね」

「はい、それで」

「それで？」

「よかつたらですけれど」

柚子の言葉のトーンが落ちた。小さくなってしまった。その小さくなった声でだ。修治に話すのであった。

「ずっと。ここにいてくれませんか」

「このお店に？」

「私と一緒に」

「こう修治に言うのである。

「本当に。修治さんさえよかったらですけれど」

「まさかそれって」

「ここでやっとだ。修治もわかった。柚子が自分をどう思ってきたかだ。

「それでだ。こう彼女に問うのであった。

「僕とだよね」

「そうです。駄目ですか？」

「見れば柚子の顔は真っ赤になっていた。柚子でなくだ。

「苺の様になっている。その顔で修治に言っていた。

「御願いでできますか？」

「ずっと。このお店に通ってきてきてアルバイトしてきたけれど」

「修治はすぐに答えずにだ。こう前置きした。

「それでもね」

「それでもですか」

「気付かなかったよ。御免ね」

「こう柚子に話すのだった。

「柚子ちゃんの気持ち。けれど」

「けれど？」

「今気付いたから」

「もう仕事の手は止めていた。そのうえで柚子に話すのだった。

「気付いたから。だから」

「だから、そして」

「御願いでいいかな」

「微笑んでだ。彼もこう言うのであった。

「このお店に。ずっといいかな」

「御願います」

その母の様になった顔での言葉だった。

「まだ。先になりますけれど」

「高校を卒業してからだよね」

「はい、それからです」

大切なことはだ。それからだというのである。

第八章

「けれど。それでも」

「うん、これからもね」

「御願います」

「こちらこそね」

柚子の紅の顔に対して修治は優しい笑みを浮かべている。それぞ
れの顔でだ。お互いに話す彼等であった。そうしてである。

三年後柚子が卒業してすぐに新婚旅行に出掛けた二人の話だ。

やはり全く変わらない美貌の京華がだ。カウンターでコーヒを飲
む先生に話しかけていた。

「ハッピーエンドですね」

「これから始まるけれどね」

「けれどまずはハッピーエンドですね」

「初恋が適ったからね」

笑顔で話す二人だった。

「いいことだよ」

「ただ」

しかしとだ。京華は苦笑いと共にこうも言うのだった。

「柚子も。凄いですね」

「凄いつて？」⁶

「小学校一年で。最初に見た時からですから」

「言われてみれば確かに」

先生もだ。京華のその言葉に頷く。それは確かにであった。

「一途だね」

「そうですね。凄く一途ですよね」

「その一途さがです」

どうかというのである。

「修治君と結ばれるものになったんですね」

「そうなるんだね。一途だね」

「この店もです」

京華は笑いながら店のことを話しはじめた。

「死んだ主人が。譲り受けたお店で」

「前にあつた場所でなんだね」

「はい、その頃からこうした外観と内装でした」

「和風の。浪漫的」

「はい、浪漫でした」

そのだ。浪漫的な、大正を思わせる店だったというのだ。

「私、そのお店が気に入ってお店に通うようになって」

「ご主人と結ばれたんだ」

「そうです。同じですね」

そしてだ。話を戻すのだった。

「柚子も。私と」

「そうだね。一途なところも」

「私の愛した人は主人だけです」

京華は亡き夫のことも話した。死に別れて随分と経つだ。その夫

のことをだ。

「このお店が。その何よりのです」

「証なんだね」

「二人の愛の。ですから」

こう話すのだ。先生に。

「ずっと。このお店はこのままです」

「ゴシックだね」

「そして浪漫です」

にこりと笑って先生に話す。

「それがこのお店です」

「いいね。一途に守っていくのがね」

「はい、それでなのですが」

「それで？」

「どうですか、もう一杯」

「こうだ。先生に話した。」

「もう一杯如何ですか？」

「あっ、それじゃあ」

先生は穏やかな笑みでだ。京華のその言葉に応えた。

そうしてだ。そのうえでだ。こう京華に述べた。

「御願いますよ」

「はい、それでは」

先生はそのコーヒーを飲んだ。その味もだ。

最初に来たその時のままだった。その時と同じく。美味なままだった。

その味は修治と柚子に受け継がれ。残っていった。二人もまた京華が夫に教えられたその味をだ。伝えていったのである。二人で。

浪漫ゴシック 完

2011・3・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4243v/>

浪漫ゴシック

2011年8月2日03時28分発行